# Hans Carossa の詩に関する一考察

加　藤　慶　二

## 序　論　1

Carossa が詩人としての本質を最も自由にまた最も明瞭に示しているのは，彼の「詩」においてである。≪Die Schicksale Doktor Bürgers≫の散文作品の昇華は≪Die Flucht≫という詩になつてあらわれてくる。それ故 Carossa の詩を解釈するにあたつて散文作品が重要な手がかりとなることがしばしばある。勿論詩と散文とではその本質を異にする。端的に言えば前者は詩人が対象から受けとり内面世界を徹しての実体化であり，言葉の響きを含めての構成であるのに対して，散文は対象と一対一の対応をなし，その符号を意味するものである。しかし Carossa において散文が詩の素材になつている場合が認められるので，その発想或いは背景になつている思想等を考究する際，詩の解釈への糸口となるのである。詩人の手紙，或いは伝記についても同様なことが言える。しかしそれも作品の触れる範囲にとどめておきたいと思う。何故なら作品から手紙，伝記を考察する場合にのみ，それ等は作品にとつて意味を持つことが出来るのである。

Carossa の生涯，詩集として上梓されたのは小冊子も含め僅か三たびであつた。もとより寡作な作家ではあるが，その詩にいたつては微々たるもので，若い時の散佚したものは別として，全体で90編余りである。しかし彼が最初に試みたのは詩であり，19才の時の ≪Stella mystica≫は後に雑誌≪Gesellschaft≫に掲載されたのである。それは≪Die Schicksale Doktor Bürgers≫が世に出る16年前である。

Carossa の詩の特徴を二三挙げてみるならば，彼の詩は主に二つの傾向に区別される。即ち Sturm und Drang 的傾向を帯びた詩と古典的傾向を帯びた詩である。1910年を中心とした「詩」では自然界に関して詠ぜられているものが多い。自然を単に自然として描写するのではなく，常になにか象徴的な意味を感じその根底まで追求しようとする努力は，単なる普通の意味での詩人ではなしに，自然の姿に関して一つの思想を持つていたからだと思う。最後に彼の——とりわけ初期の ≪Gedichte 1910; Ostern 1916≫——詩作品を概観すると，そこに展開されている思想は，ともすればその統一性を欠く。それは Carossa の場合私はこれ等のものが時間的に発展していつたというよりも，既に詩人の内面において並列的に伏在していた諸契機が，交互に解明されていつた結果であると考える。

Carossa の詩を論ずるに先だつて，詩人の内的発展について少し概説してみたいと思う。

## 2

1878年 Carossa は Bayern 州の上部 Isar 河畔の Tölz に生れた。父は医師，母は小学校の教師で，彼は Landshut の Gymnasium を経て München 及び Leipzig の大学で医学を

学んだのである。その間彼は Karl Goebel の植物学, Adolf von Baeyer の化学, Richard von Hertwigs の動物学, Rückert の解剖学等の講義に非常な感銘を受けたことは≪Das Jahr der schönen Täuschungen≫ に述べられている。彼は卒業後, 父の業を継いで Passau や München で結核の専門医として開業するかたわら, 文学への道を歩んだのである。

Carossa を育てあげた Bayern 州とはどのような所なのであろうか。いろいろなことを総合してみると, 非常にこの地方は Katholizismus の盛んなところで, 宗教教育がその結果重要視されており Carossa もこの教育を受けたことは周知のとうりである。しかしその反面一方では古くから伝わる異教徒的な感情も庶民の生活, 風習のなかに根強く存在しているのである。つまり死者への信仰とか, 死者との交感等である。またこれは一般に言えることだが, 北方の人に較べ南方の人達特有の快楽的な現世肯定主義を Bayern の人々は持つているのである。以上の要素は Carossa の精神形成に少なからず影響を与えている。この他≪詩と真実≫の書とでも言うべき≪Führung und Geleit≫の中で自らも述べているとうり, Goethe, Novalis, Stifter の思想, 自然観等により少なからぬ影響を受けている。このことに関していままで多くの論文が述べているのでここでは触れないことにする。しかし≪Auf wie vielen und wie fruchtbaren Ebenen sich ein Ich bewährt, nur darauf wird es ankommen, …≫ と述べているとうり Carossa は≪Eine Kindheit≫から≪Verwandlungen einer Jugend≫と単に人生の一つの道程としてではなく, 常に人生の「本質の始源の姿」を, 言い換えれば我々の中に存在する絶対的なものへ, あくまでも自己の魂を徹して探求していつたのである。このような精神が常に詩人の心の奥に存在していたからこそ, 逆説的な言い方になるが Goethe が Herder から, Rilke が Rodin から受けたような強い影響は Carossa の場合認められず, したがつて内的発展の底に流れているものは彼自身の体験なのである。詩における前期の作風と後期の作風がそれを如実に示している。

## 3

Carossa の祖先はイタリヤからアルプスを越えて移住して来た人達であり, 両親からは二つの相反する血を受け継いでいた。母方からは豊かな才能と賢実で常識的な性格を, 父方からは非常に情熱的な傾向, ひとたび方向を定めると日常的なもの, 否, 伝統的なものさえ否定するような激しい性格を受け継いでいたのであつた。そして母方の血にひかれた Goethe とは逆に, Carossa は自からも述べている通り父方に対して≪…, was ich ihnen am höchsten anrechnete, ihre ehrgeizige Freude am Außerordentlichen, ihre Bemühung, aus dem Alltag heraus zu einem freieren Wirken zu gelangen. ≫とひかれたのであつた。

Carossa の精神形成は端的に言つて dionysisch から apollinisch へとおこなわれていつた。勿論一視野から判断することは不可能な複雑な精神形成について, このように単純には説明出来ない場合もあることはけだし当然のことであろう。幼年時代の Carossa の性格は人一倍強い感受性を南方の人達特有の情熱的な, 空想的な性格を持ち, 日中すらもしばしば自分の描く夢の中に自分自身が溺れてしまい, 空想の世界と現実の世界が区別出来なくなつてしまうのである。このことは≪Eine Kindheit≫ 或いは≪Führung und Geleit≫等を読んでみれば容易に理解されることと思う。

しかしここで一つ問題になることは詩人の内的発展を推察するに際して, その判断は主に

Carossa の自伝的小説と言われている諸作品からである。そしてそれが作品である以上その中に虚構が認められることは当然のことである。Carossa が「幼年時代」を≪Meine Kindheit≫とせず≪Eine Kindheit≫としたことでも理解できるであろう。又 Hofmannsthal に宛てた手紙にも Carossa は虚構を認めている。だが今ここで問題にされていることがらは，詩人が個々に出合つたこと，そのことではなく，それが詩人の目にどう映じたかであり，詩人をフィルムに撮影した行動記録ではなく，その背後に横たわつている内的世界なのであり，いわば詩人の実の姿なのである。Carossa の場合虚構はいわゆる虚構に非ずして，実相への深い観入に他ならない。≪Der alte Taschenspieler≫の中で Zauberer をして ≪……aus Täuschungen endlich ein Wahres entspringt.≫ と言わせている。それは詩人が普遍的なもの，本質的なものを追求しようとする精神と相関なものである。

さて幼い頃の Carossa の空想力の豊かな，感受性の鋭い，激しい情熱的性格はどのように変つていつたのであろうか。前述したように父方の祖先に憧れを抱いていた Carossa は，自から日常的世界を踏み出し軍医として従軍したのであつた。≪Rumänisches Tagebuch≫ に描かれている彼の姿は幼年及び少年の頃と違つた面が強く前方に押出されている。それは自己を制御するという厳しい精神である。相反するローマン主義と古典主義が互に補いつつ螺旋形を描きながら上昇していつた如く，いわば Carossa の南方的な明るい性格は北方的なものとでも言うべき「暗さ」を帯びた忍耐を必要とする厳しさへ向つたのである。≪Flucht≫という詩の中で，人々に「北方へ」という言葉から，真夜中，つまり「暗さ」に向つてという意味を含めて

Ihr müßt wandern gegen Mitternacht,
Müßt ins Tal des Ursprungs ziehen!

このように Carossa は始源の姿を求めつつ，形而上的歩みを絶えず北方にむけて続けたのである。Goethe が Weimar からの Italienische Reise により，北方的・中世的な暗い生命衝動から南欧古代の調和的・秩序的な芸術精神へ憧れることにより古典主義へと進んだのに対し，Carossa においては南方的な明るさが北方的な暗さに結びつくことにより，詩人としてのより高次な世界に歩み入つたのである。

いまこの変遷が作品の中でどう反映していつたか，具体的に求めてみよう。まず私はここで Carossa の作品にあらわれてくる「夢」に着目して，その内容がどのように変つていつたかを少し述べ，先に挙げたことを別な角度から跡づけてみたいと思う。

## 4

1908年の7月30日から始まり次の年の5月16日で終る≪Die Schicksale Doktor Bürgers≫は約10ケ月の間に夢及び夢に類する幻想を取り扱つた場面が12に達している。11月14日，16日，12月5日，7日，15日の夜中，2月20日（これは Hanna の夢物語），3月1日（発熱している Hanna の狂気のような幻想），4月8日，25日（Hanna の夢物語），5月12日，16日。以上 Hanna の夢及び幻想を加え，上述のように12にわたるこれらのうちで，憧憬，希望，歓喜等のものとして見られるものは7回に及び，憧憬と恐怖が錯綜しているものは1回であり，恐怖，苦悶の表示として見ることのできるのは僅か2回に過ぎず，他の2回は恐怖，苦悶の象徴でもなく，かといつて希望のそれでもない。≪Rumänisches Tagebuch≫ で

は約2ケ月の間に7回夢が出てくる。即ち10月20日，26日，11月12日午前6時，18日，12月12日夜11時半，13日朝7時及び15日朝である。前者の作品が約10ケ月，後者の作品が約2ケ月の間に亘つて述べられていることを考慮すれば，絶対数は少いが「夢」の頻度は後者が前者を凌駕していることになる。この他の作品にも夢に関した個所が出てくるが，この二つの作品に較べると遙かにその数は少い。

≪Die Schicksale Doktor Bürgers≫に登場してくる医師は——それはとりもなおさず当時の Carossa 自身の精神の姿である——良心的で感受性が強く，責任感のある人間である。彼は自分の所へ救いを求めに来る患者達を自分の力では癒すことが不可能であると知つたとき，即ち彼をとり囲む現実が彼自身の努力，意志によつて左右することが不可能であると感じたとき，この外界は全く侵入者としてのみ彼の前に立ち現われるのであつた。Bürger の感受性は繊細で鋭いものだけに，それだけ一層この外界の侵入は無数になり多彩になり更に一段と激しくなり，その体験は更に彼の感受性を研ぎすませることになつたのである。Bürger の思考は或る面で，この侵入者に対して，彼の現実における行動のベクトルを自己の内部へと向けたのである。（これは狭い意味で受身的態度と呼べると思う）そしてそれはこの場合「自殺」という型で最後にあらわれてくる。

このような精神的道程において，彼の内的感情を充すものは，唯だ「夢」となつてあらわれてくるのである。Sigmund Freud の言葉を借りれば「願望充足の夢」である。Bürger の夢は現実からの心の逃避の場所となるのである。Bürger の心の内部に日常生活の耐え難さが激しくなればなる程，「夢」は心に安らぎをもたらし，生命そのものの香りがし，ここにおいて Carossa の言う人間の根源的姿「少年の日」に還るのである（5月12日）。だが彼は夢から再び現実の世界へ戻つて行かなければならなかつた。その瞬間彼は医師というわくで決められた社会の一員になるのである。いわば二つの法律に支配される二重国籍者としての人間。内的世界に属する彼と，現実社会に属する彼との間隙は，彼を孤独にし悲劇的にする。そしてその間隙を自からの力で埋めることが出来ず，ついに自殺するのである。

≪Rumänisches Tagebuch≫に記せられている Carossa 自身の露営の夢の内容の大部分は，故郷に残した家族——就中年のゆかない Wilhelm を想う父性愛より生れた憧憬の発露である。この作品において Bürger に認められたような受動的態度は影をひそめ，活動的な克己の医師として登場してくる。

Bürger の「夢」は彼にとつて心の安らぎの場所となつたが，現実における自己の行動の支えとはならなかつた。≪Rumänisches Tagebuch≫の「夢」はBürger のそれとは異り，父性愛を示している。そしてこの中で ≪……Bestes ist verwahrt in einem Traum……≫と言い，すべての人々の難苦を甘美なものにするのは「夢」の中であると述べ，現実と夢を結んでいる。そこには Bürger のような陰欝さはなく，明晰がある。それが更に後の作品になると≪der Traum verläßt mich, er fliegt wie ein Gewölk mit allen meinen bösen Geistern von mir fort.≫ (Geheimnisse des reifen Lebens) ここにおいて夢が精神を癒すと同時に高めるのである。そして1943年の詩 Gestreift vom Todeswind には≪Wir müssen wachend weiterbauen, / Was träumerisch begann.≫ このように夢は現実世界の上に重なり，更にそれが建設的精神まで昇華するのである。

Carossa の少年時代まで顕著であつた空想力の強い，そして自分の情熱に溺れてしまう南方の人特有のこの性格は，北方的なものとでも言うべき，暗い厳しさへ絶えず形而上的に歩

み続けることにより，調和あるものとなり，形成され，より高く成長するのである。≪Rumänisches Tagebuch≫には，活動的な意志の強い軍医として登場してくる。その精神の変転は，作品中の「夢」を着目してもわかるとうり，初め Bürger においては現実からの逃避の世界であつたものが，後にその位置はまつたく逆になり，精神に充足を与えつつ，Faust の第Ⅱ部を思わせるような，現実における建設精神への萠芽となるのである。

このような Carossa の，散文作品において跡づけられる内的発展のあらわれは，冒頭で述べた如く詩と散文とではその本質を異にするが，詩においてもまたその作風を顕しく変えていつたのは，けだし当然のことである。以上のことを考慮に入れながら，Carossa の詩について若干見解を述べてみたいと思う。

## 第 1 章

初期の抒情詩に注目してみると，Carossa の詩の中で一番多いのは「自然」に関する詩である。初期の作品は非常に力強く激情的で「若き Goethe」を想わせるとは Hofmannsthal が手紙で Carossa に言つた言葉である。

Carossa の自然に対する態度の一つの特徴として，C. Heselhaus は目に見えない自然の法則から，それを捉えることにより，世の中に関する一つの新しい認識にまでなした，[註1] と Carossa の自然詩について指摘している。即ちそれは，人生の様々の不可解なものをこの自然の世界から解明しようとし，自己を限りなく伸ばそうとする努力であり，又態度である。

Eines Farnstocks Trieb, der eben
Leis den künftigen Fittich kündet.

Und du fühlst, wie du auf Erden
Kaum als Kind so warm empfunden,
Fühlst ein fremdes, niedres Werden
Dir ganz nah, dir blutverbunden.

— Erlebnis —

彼と自然との関係は自然に対して自己を随順させてゆくというよりも，もつと緊密なものであり言うならば Carossa は自然の最も内側の人なのである。この場合彼の自然とは，かつての Sturm und Drang 時代の思想と同じように自然は神の被造物に非ずして，それ自身の中に創造と形成作用を有する有機的生命体であり，森羅万象，人間も又この自然の生としての所産であるとの思想であり，最高の目的は「自我」を生かし発揮することである。それ故，彼は自然と自己とを対置させず，むしろその内部へ自己を溶しこみ，自然と一体になりその神秘と荘厳を体験するのである。即ち有限なる自己を無限なるものの一分子として直観し認識しようとする，言わば Sturm und Drang 的態度である。

Rase, rase
Nur, o Sonne !
Rasend schwing uns,
Bis wir ewige
Ruhe ahnen !

— Gesang zur Sonne —

Carossa はかくして自然と一体となり，自然の中に自己を見出し，自己の中に狭い意味での自然を感ずるのである。そしてこの狭い意味での自然を伸すことによつて自己を高めるのである。

Im kleinsten Ringe wags, dich reich zu leben !
Ein Ganzes, nicht das Ganze wirst du fassen,
Um es zu dir, ins Menschliche zu heben.

— Der Morgengang —

そしてこの詩の最後において Carossa は自然に向つて次のように叫ぶのである。

Himmel und Erde, schenkt mir Leben ! Leben !
Und segnet meine Hand und euch in ihr !

この詩においても Carossa の激しい程の力強い自己と自然の一致を見る。前述した詩人の dionysisch な面は列挙したこれらの詩の中において感じとられることであろう。1910年及びその後に出版された詩集の自然詩は，多かれ少なかれこのような傾向を帯び，この ≪Der Morgengang≫に代表されていると思う。

## 第 2 章

これらの詩に認められる自然に関する思想と平行してあらわれてくるのが，数こそ少いが自然と対比しつつ自己を徹して人間の在り方を追求し，最後にはその存在をして時間空間を超越するものにまで高めようとする努力である。

Ja, wir sind Widerhall ewigen Halls.
Was man das Nichts nennt, ist Wurzel des Alls.

即ち自己とは永遠と時間との統合，有限と無限，必然性と可能性との統合である。そしてこの統合を如何に現実のものにするか，Carossa にとつてそれは終生の課題であつた。

Wollen 〔wir〕 die Kreise des Da-Seins durchmessen !
Was hier nicht gebunden wird, ist nirgends gebannt.[註2]

Carossa は決して観念の世界へ逃避しようとしなかつた。彼の「夢」が単なる夢として消えていつたのではなく，それが強く現実社会に結びついた彼の生き方は，どこまでも人間の理想の在り方をこの世の中において探求したのであつた。

O verlerne die Zeit,
Daß nicht dein Antlitz verkümmre
Und mit dem Antlitz das Herz !
Leg ab deine Namen !
Verhänge die Spiegel !
Weihe dich einer Gefahr !

Wer einem Wink folgt im Sein,
Vieles zu Einem erbaut,
Stündlich prägt ihn der Stern.

Und nach glühenden Jahren,
Wenn wir irdisch erblinden,
Reist eine größre Natur.

Carossa は厳しいまでも外面の虚色とか飾りを嫌つた。自からは節度と静謐を，自己に対しては少しの妥協をも許さない厳しさを持つて，常に普遍的なものを，奥底に流れている本質的なものを，あらゆるものをとうして追求したのであつた。かくなればこそ≪Rumänisches Tagebuch≫において少佐の人間像を見事に捉えることが出来たのである。我々社会の中に生ずるその本質を，或いは我々の実存を深く追求する為には，或る時には日常的なもの，因習的なもの，又或る時には伝統的なものまで否定しなければならない。かつて Carossa が祖先の話しを Maria から聞かされた時，祖父の激しいまでのかかる態度に少なからず心をひかれたのであつた。≪verlerne die Zeit≫それは主体性の確立であると同時に時代に捉われないことであり，いうなれば我々社会の安易さからの脱皮であり，普遍的なものへの追求に他ならない。我々はややもすると画一的なものをそのまま踏襲し，各個人の生き方は一つのパターンにあてはめられる。世間話しをし，好奇心にあふれ，ただ時代の波に流され沈んでゆく。かように人々は平均性と平凡性のうちに分散しているのである。このような状態においてふと目を彼方に向けると，人々は限りない実存の不安に襲われるのである。Carossa はその不安に対し静かに反問する。≪Warum geben wir uns hin/Jedem eitlen Grauen?≫[註3] このような「空虚な不安」にかられるのは，我々の存在が不安定であり，事物の存在と違つて常に時間というもので規定されているからである。しかし人間には，このような動かすことの出来ない必然性の他に，その反面無限なるものへ限りなく飛翔する可能性が与えられている。この可能性を獲得してこそ，そこに人間の真の在り方が展開されるのである。≪Schwing ich mich ums Zeitenlose≫[註4] このいわば無時間的存在—Zeitenlose—に向つたとき，初めて我々の「顔は心配せず」「顔と共に心も心配せず」あらゆる日常的名称は不要のものになるのである。≪Verhänge die Spiegel!≫[註5] とは虚像の姿を消せということなのである。

Carossa の「時間を越えているもの」とは一体何を示すのか，ここに至つてはつきり我々の真の姿が確立され得るものは何か——それは死である。≪Was einer ist, was einer war, / Beim Scheiden wird es offenbar≫[註6] 死のきわに立つてこそ，そこに人間の可能性が明確に提示されるのである。人は常に脱自的であらねばならない。何か現在において行動を未来に向つて起すとき，我々は過去における自己をそこから解放し未来に向つて投げ，いわば己自身に先行するのである。ここに人間の真の自由が存在し，事物のたんにあるところのものであるような存在とは異り，現にある自己からあらぬものへ向つて行くのが人間本来の在り方なのである。≪Versucht dich manchmal noch die alte Zeit ……? / Es frommt nicht mehr. Der Kreis ist überschritten, /……≫[註7] 過去は成程安住である。しかしながら過去より一歩も外へ出ないということは我々本来の在り方ではない。この非本来的在り方から本来的在り方に解脱させるのが，Carossa の場合自分自身の内に在る≪Geister≫であり≪Flammen≫なのである。≪Uns lösen keine Geister, keine Flammen, / Als die aus unserm eignen Blute stammen.≫[註8] 解脱することにより，即ち脱自的になることにより自己を人間本来の必然的な「死への存在」に目覚めさせるのである。死こそ我々に与えられた唯一の時間によつて左右されることのない，時間に没交渉な存在であり，未来に向つて投げかける己の姿に最後の決定的な結末をつけ得るのである。人がこの世に生れた瞬間，既に確実な己の死の存在に自か

ら進んで凝視し立ち向う者は，初めてその身において本来的な自己を体験できるのである。≪Du wirst mich zurücknehmen, tödlich formender Geist! Ich fühls an der unendlichen Stille, die jetzt bei mir einkehrt, an den Blicken, die du mir manchmal öffnest……. Die Masken des körperlichen Geschehens, die mich Eingeschüchterten oft schreckten, du lässest sie langsam fallen, mir ahnt durch tausend Wandlungen dein wahres Gesicht.[註9]≫ Bürger の場合死と生とをつかさどる霊が，現象世界の仮面を落し本来的な生き方に導くのである。それ故 Carossa は≪Weihe dich einer Gefahr!≫と叫ぶのである。それは「死を恐れるな」という言葉で置き換えても良いかも知れない。幼い時から危険性のあるもの，非日常的なものに憧れを抱いていた Carossa は第一次大戦の時に，自から軍医を志願し戦場において死の際まで進むのである。かかる精神があつてこそ，前述のあの少佐の人間像が見事に描き出されたのである。日常的な一見不可解な混沌としたものも，かかる人の内面では，その根源的なものを観姿しているので ≪Vieles zu Einem≫ と，それらのものは一つのものとして映ずるので，何んら躊躇うことなく「存在の中で一つの合図に従つて」≪einem Wink folgt im Sein,≫ 行動できるのである。そして「霊」或いは「炎」により己を死への存在に投げかけることにより，非本来的自己から本来的自己へと解脱してゆくのである。そしてこの身が「白熱する年月の後」滅びたとしても，そこに刻まれた行為は決して移ろうことなく，有限なる自己を無限な一分子まで昇華させ，時間と永遠を内に抱括した ≪eine größre Natur≫ とまでなるのである。

## 第 3 章

Carossa は常に己を北方的な厳しさへ形而上的に或いは形而下的に歩ませることにより，自己を形成しつつ詩人の道を刻んだのである。こうして彼が求めるものは≪Heimweg≫における ≪du≫ と呼びかける恋人であり，或る時は無限と有限を内に統合した ≪Mutter≫ と呼びかける≪Natur≫であり，又或る時は≪Rast≫における ≪Kühle des innern Gestirns≫ なのである。それ故 Carossa は広い意味において，旅の人と呼ぶことができるであろう。彼の詩においてあたかも Carossa は憧れの究極の地点に到達したかのような感を我々に抱かせるものがある。

Unzugänglich schien der Gipfel;
Nun begehn wir ihn so leicht.
Fern verdämmern erste Wege,
Neue Himmel sind erreicht.

しかし Carossa はここを最後の究極的な場所としたのではなく，それは彼の心の一時の造形であり，詩人の心はとうていそこにおいてとどまることなく，新たな形而上的旅は又始められるのである。

Er (=ein Wandrer) geht gleich weiter, und es rauscht wie immer.
O freue dich, du bleibst nicht einsam hier.
Viel Wandrer gehen fern im Sternenschimmer,
Und mancher noch ist auf dem Weg zu dir.[註10]

Carossa のこの形而上的歩みは，常に遍歴と到着，憧憬と円現の相を回帰しているのである。

しかしながらその歩みは単にくり返されているのではなく，詩人の心の内部における憧憬の深さによつて形而上的歩みがくり返され，より高いものへと螺旋的に昇るのである。

Die Sehnsucht schweigt, ins Ewige gerettet,
Doch wo sie klang, da gärt aufkreisende Welt![註11]

## 第 4 章

散文作品において認められた Carossa の精神形成の発展は，詩作品において Sturm und Drang 的傾向から古典的傾向へと導くのである。1940年～'45年にかけての詩集≪Stern über der Lichtung≫になると，その詩風は 1910 年の Gedichte, 1920年の Ostern, Ein lyrisches Flugblatt. と異つてくる。それは20年という両作品間のへだたりが，詩人の精神及び肉体を徹し必然的に古典主義的なものへと変えていつたのだろうか？

In trüben Streifen
Glimmt Morgenröte.
Lautlos im Schneegezweig
Schlüpfen die dunklen
Überwinternden Vögel.
Ein Sternbild leuchtet,
Indem es hinlischt,
Noch einmal auf.

— Stern über der Lichtung —

1940年以降の詩を後期の詩と呼ぶならば，1910年及び1920年に上梓された詩を前期の詩と称せよう。後期の詩は前期のそれに較べ，力強さ，対象に激しく迫る激情は認められず，上に挙げた詩でもわかるとうり，厳しい制御を淡いベールで包んだ枯れた美しさがそこにある。それは弱さではない，澄んだ想念である。古典的な静謐である。

Carossa は一方では死への存在を内に意識しつつ，又一方では「或る一部の全体」をとらえることにより，これを伸し，伸すことによつて自己をも高めようと努力したのであつた。[註12] 彼は常にそれを求めた。しかし20年間の詩の空白は，それ以後の経緯を伝えず，いきなり古典主義へと変つていつている。何故古典的傾向を帯びるようになつたか。それには先ずこの間の過程を考察しなければならない。この空白時代の推移はその間に書かれた散文作品と客観的な歴史事実によつて考察する以外にはない。1920年から1940年にかけてのドイツは，否当時の社会はかつての国家が，我々人間と同様に，一箇の形態において統一されていたが，それとはまつたく逆になり何一つ取り上げてもその本来の意味を失つていた程ひどかつたことは我々の記憶にまだ新しい。そしてその社会から課せられた人間の活動はその意味を失つた程錯綜と矛盾と相剋があつたのである。かかる状態の下に人間が，己の人間としての存在を主張する為には，その状態を否定することによつてのみ可能であつたのである。Carossa はしかし否定の言葉は残さなかつた。その代り常に彼は「最高のものは夢の中に在る」等の言葉を残し，夢の中において精神が高揚され得るとは今まで述べてきたとうりである。これは即ち現実の状態を否定する一表現法である。そして1943年の Gestreift vom Todeswind

という詩において前述の本文53頁の Der Morgengang の一節（Ein Ganzes, nicht das Ganze …）と表現の差こそあれ，結局は同じことを主張しているのである。≪Wir müssen wachend weiterbauen, / Was träumerisch begann.≫

第二次大戦下政治的・社会的条件により詩人の生活は調和を拒否されたし，己自身も目を閉じてまた拒否したのであつた。しかし精神面でその根底たるべき調和と統一を取る為には Sturm und Drang 的激情や或いはローマン派の素朴な歓喜では足らず，古典的な典雅さ，或いは人間の精神に保たれた均衡への静謐を必要としたのであつた。

後期の詩において古典的傾向が認められるのも以上の理由からだと私は思う。第一次，第二次大戦をとうし，Carossa がそこにおいて人間としての存在を見失なわず確保しようとする行為は著しく古典主義的な性格を帯びていると言える。又逆に古典主義とは人間が窮地に追い込まれたとき，そこから脱出する為に精神が示す "ベクトル" なのである。それ故あの悪夢の時代に，孤立して存在することを強いられた人間が己を表現するにも，又己を検討するにもかかる態度で臨む他なかつたのである。その結果自己を厳密な冷静な態度でもつて考察し分析できたのであつた。その結果 Carossa の場合，人が生きて行く為最も大切なものは自己に対しては死への存在を自覚させ他の人に対しては愛することであつた。≪Heimweg≫という前期の詩において，帰り来る人を待つために，恋人は幸福に身をゆだねながら，外を見るため凍ついた窓ガラスに息を吹きかけるのである。[註13] これはとりもなおさず愛することにより，愛されることにより今まで見えなかつた豊かな世界が，彼方に広がることを意味している。

Carossa のこの「愛」と冷静なまでにも己の死の影を見つめる態度は，75才の時≪Rauhes Land≫という詩を生みだしたのである。死ぬ3年前，衰えゆく身に己の命を悟り，それに対して詩人は決して逆うことなく，老い去りゆく者をおそわずにはいない寂寥感と無常の実感を，自ら進んで内に抱きとめ更に高い想いへと為すのである。

……

Vielleicht um Ostern, wenn in unserm Norden
Die Heide blüht, wird einer fromm versenkt,
Und bald ist Staub und Geist aus ihm geworden—
Wohl dem, der dann noch freundlich an ihn denkt!

Noch sind wir stark. Die Luft blinkt von Kristallen,
Und Hoffnung lebt im Greis wie einst im Kinde, —
Land ohne Wein und ohne Nachtigallen, —
Daß er in dir den Stein der Weisen finde.

人々には，ぶとうもなく小夜啼鳥[註14]もいないそのような国において「賢者の石」が見つかるようにと願うのである。このことは様々に解釈できよう。物質的に乏しく精神的に満されない国において，Carossa が現実においては探し得ず「夢」においてのみ感得しその結果人生に意義を見出し，積極的に行動へと駆りたてたような対象が，その国の中に在ることを願つたのかも知れない。ともあれこの願いは，本来的な生き方を貫き，愛の精神を持ち続けた詩人の心情のあらわれなのである。

第1章において dionysisch な Sturm und Drang 的傾向の自然詩，第2章では自然をとうしての実存的傾向の詩，第3章では詩人が常に形而上的歩みをなしたその足跡を詩に求め，第4章ではその結果，老詩人の姿をとらえることにより，古典的な詩を考察した。前期の Carossa の詩にはさまざまな思想を認めることが出来る。それは前に述べたとうりそれらの思想が時間的に発展し，解明されたのではなく，詩人の内面に並列的に伏在していたものが交互に解明された為である。一見彼の詩が不統一なのはこの理由からである。しかしその底にはどこまでも本来的な，詩人の道を歩み続け，我々を暖い目差しで見つづけた Carossa の姿が感じとられることであろう。 (1964年11月)

## 註

1： Heselhaus, Clemens: Deutsche Lyrik der Moderne, S.346 ff.
2： Gesammelte Gedichte: S.117 [wir] は筆者註
3： Gesammelte Gedichte: S.46
4： Gesammelte Gedichte: Ein Stern singt, S.120
5： Der alte Taschenspieler にも鏡と虚像のことが魔術師によつて語られている。
6： Gesammelte Gedichte: S.117
7： Gesammelte Gedichte: Gruβ, S.75
8： Gesammelte Gedichte: Leidenschaft. S.83
9： Die Schicksale Doktor Bürgers: 3.Mai.
10： Gesammelte Gedichte: Der alte Brunnen, S.123 (=e.W.) は筆者註
11： Gesammelte Gedichte: Stella mystica (1898), S.76
12： Der Morgengan の詩 本文53頁参照。
13： Heimweg (……Ich weiβ, daβ du noch wachst / Tief tief im Glück. / Der Schirm deiner Lampe / Färbt dich wie Wein, / Du hauchst in das Eis / Deines Fensters hinein, ……)
14： Wein のことを Norddeutsch の方言では〝ぶどう〟の意である。

※：Hugo von Hofmannsthal / Hans Carossa Briefwechsel : Die neue Rundschau 1960
追記：二十世紀のドイツ文学：慶応義塾ドイツ文学会編．現代ドイツ文学：手塚・佐藤編を参考にさせていただきました．

Journal of the Faculty of
Liberal Arts and Science, Shinshu University
1964, No. 14, pp.

## Summary

Zusammenfassung
Über Hans Carossas Gedichte

Keiji KATO

In diesem Aufsatz habe ich Hans Carossas Gedichte vom Standpunkt seiner inneren Entwicklung aus besprochen und vor allem in dieser Einleitung betrachtet, wie er sich von Jugend an ausgebildet hat. In der Frühzeit gibt es bei ihm viele Naturgedichte. Es ist klar, daß man in diesen Naturgedichten in den 1910 ausgegebenen Gedichten, wie 'der Morgengang', 'Gesang zur Sonne' usw. Thematik und Formen von Sturm-und-Drang-Lyrik bemerken kann. Diese Tendenz aber wurde später zur klassischen, während der Dichter, dem Nördlichen in sich folgend, nach Innen oder seines eigentlichen Weges ging.